

# 「ヘルか☆へブンか」

## 【登場人物】

閻魔大王

側近（リョウ・ペイ）

博士（ケン・ナカタニ）

アンドロイド（アン子）

殺し屋（トシユキ・ヒライ）

女殺し屋（マリ・ヒライ）

エイリアン／係長（ユウジン・タナカ）

部長（女性）

先輩

希望／新人（ノゾム・エンドウ）

晴（ハル・コクブン）

側近の部下

エイリアン達

逃げ惑う人々

【プロローグ】

舞台はあの世の裁きの間。

側近「裁かれ人、前へ」

明転。

舞台には側近と殺し屋。手元の資料と殺し屋を交互に見ている側近。

側近「ジャック・D・ボーン。生まれはメキシコ、チワワ州。数々の人間、若者、老人、男性、女性を問わず、痴漢を繰り返す。ついた呼び名は無法地帯のジャック。警察にメキシコを追い回され日本へ高飛び。その後は整形と日本の偽名登録を済まし、再び痴漢を繰り返す。中々の悪人のようだ。そして死因はピストルの弾を急所に撃たれて死亡。享年40歳、か……あ、これ全然違う人の資料だった」

殺し屋「だよな？俺全然ジャック・D・ボーンじゃないもん。生まれメキシコじゃないもん」

側近「こっちだったこっちだった（2枚目の資料を見る）。えーっと……トシユキ・ヒライ、だな」

殺し屋「そうだよ」

側近「トシユキ・ヒライ。生まれは日本。幼少期、両親はあまり家におらず、主に姉と2人で過ごす。小中高は近くの学校に通う。好きだった漫画はドラベンとゴルゴ13。渋いね。部活動は野球部に所属し、初恋相手はマネージャー。ういゝ（冷やかす）。その後大学受験に失敗、元々ゴルゴ13に憧れていたのもあり、姉と一緒に殺し屋になる。急にどうした？嘘だろお前？」

殺し屋「まあ自分でもどういいう経緯だとは思うよ」

側近「その後仕事の依頼により数々の暗殺をこなす。武器は主にナイフを使用。ゴルゴなの……えーそんなゴルゴ・トシユキの死因は……依頼人に後ろから刺されて死亡。駄目じゃねえか！後ろからやられちゃってるじゃん！ゴルゴなのに……」

殺し屋「ゴルゴではないよ」

側近「しかも依頼人に殺されるって……だっさあ……」

殺し屋「さつきからうるせえな！さつきと話進めろよ」

側近「偉そうに。では今からお前のやってきた悪行と善行を述べていく。黙って聞いてろ」  
殺し屋「ちっ」

側近「まずは悪行。暗殺の回数、99回。フラれた女性にしつこく電話した回数、99回。

信号無視の回数、2回。信号はけっこう守るね」

殺し屋「うるせえな。そんなことまで分かっちゃうのかよ」

側近「幼少期、友人の遊戯王カードを盗んだ枚数、2枚」

殺し屋 「そんなことまで分かっちゃうのかよ！」

側近 「盗んだカードは『クリッター』『デーモンの』『

殺し屋 「いいよいいよ！そんな細かいところまで」

側近 「とりあえず悪行の発表はこれくらいにしてやろう。では次は善行！（資料を見る）  
……無し！」

殺し屋 「いや無しってことは無いだろう！」

側近 「ふん、お前みたいな態度わつるい奴はわつるいことしかしてねえんだろ、おっと次の資料に書いてあった（3枚目の資料をめくる）」

殺し屋 「なんだお前」

側近 「善行。毎朝花に水をやる。捨て猫には必ずエサをあげる。例え依頼であっても子供の命は獲らない。お前…（尊敬風）」

殺し屋 「よせやい」

側近 「意外な一面を見たよ」

殺し屋 「よせやいやい」

側近 「キモ」

殺し屋 「なんでだよ！」

側近 「そんな髪型で」

殺し屋 「髪関係ねえだろ」

側近 「では悪行・善行も出そろったところで！いいよ裁きの時間だ」

殺し屋 「裁きの時間だと？」

側近 「そうだ。お前は今からあの！『閻魔様』に裁いてもらうのだ！天国か地獄かをなあ！」

殺し屋 「何！？」

側近 「それでは閻魔様ー！ご登場下さいー！」

派手なBGMと照明効果で閻魔大王が下手から登場する。

殺し屋 「これが…閻魔…！」

側近 「様をつける！さあ閻魔様！判決を！」

閻魔大王（以下閻魔） 「話は全て聞かせてもらった。なるほど悪行だけでなく、善行も多少は積んでいるようだ。しかーし！トシユキ・ヒライ!!お前の判決は…!!」

間

閻魔 「一旦休憩！」

側近 「一旦休憩！（法螺貝を吹く）」

殺し屋 「いやいやいやいや」

閻魔・側近「え？」

殺し屋「休憩いります？なんもしてないじゃないすか」

側近「うるさい！閻魔様の仰ったことは絶対なんだよ！」

閻魔「ふい〜迷うわ〜」

殺し屋「いやまあ迷ってくれるのはありがたいですけど。殺し屋なんでね、絶対地獄だと思  
ってましたから」

閻魔・側近「え？」

閻魔「では本人が望むなら！」

側近「地獄行き！（法螺貝を吹く）」

殺し屋「いやいやいや！」

閻魔・側近「え？」

殺し屋「別に地獄を望んでる訳ではないですから！」

閻魔「……何あいつ？」

側近「すみません閻魔様！こいつちよつと……イカレてるんで。なんだお前？何度も水差し  
やがって！閻魔様だって色々考えておられるんだよ！」

殺し屋「じゃあ俺：天国に行きたいんですけど？」

閻魔「そういうんじゃない」

側近「そういうじゃないんだよー！じゃあ行きたいとかじゃあないんだよー！」

殺し屋「じゃあどうすりや良いんですか？」

側近「お前は黙ってれば良いんだよ！」

閻魔「発言を許そう」

側近「何か言いたまえ」

殺し屋「なんだお前。じゃあ意見させてもらいますけど。確かに俺は殺し屋だった。裏の世  
界では『トウナイトアサシン』っていう通り名が付くくらい、名は広がっていた。

しかし俺は、あくまで筋の通った依頼しか受けてねえ。無差別に人を殺すようなこ  
とは一切やってねえ。俺は……心まで腐らせちゃった覚えはねえんだ！」

間

閻魔「ごめん、全然聞いてなかった」

殺し屋「なんでだよ！」

閻魔「お前が最初の方に言った『トウナイトアサシン』ってのに意識もってかれちゃって」  
側近「分かります（笑いを堪える）。後の話全然入ってこなかったです」

殺し屋「良いだろがトウナイトアサシン！俺は気に入ってるけどねー！」

側近「閻魔様、時間も押していますし……もうテキトーにやっちゃいましょう」

殺し屋「おい！テキトーに済ますなよ！」

「ヘルか☆ヘブンか」

閻魔 「あい分かった！トシユキ・ヒライ…貴様の判決は…!!」

閻魔、側近と殺し屋をジロリと見渡す。

閻魔 「一旦保留！」

暗転。

(OPが入るならここで)

【1幕】

舞台は研究所の一室。

アンドロイド（以下アン）「ハカセ、アサデゴザイマス。ハカセ、オキテクダサイ」

明転。

舞台には椅子に座る博士とその横に立つアンドロイド。

博士「うむ…朝か。今日も正確なモーニングコールじゃったわい。命令通り、よく働く」

アン「ハカセ、ゴメイレイヲ」

博士「しかし…それだけじゃ。この人型アンドロイド、通称アン子にも感情を生み出すことはできなかつたわい…。所詮はワシの言うことを聞くだけの心の無い機械…」

様々なものを発明してきたが…感情を生み出すことが如何に難しいか…」

アン「ハカセ、ゴメイレイヲ」

博士「アン子、お前に感情はあるか？」

アン「カンジョウ…？」

博士「すまん、なんでもない。それではアン子よ、コーヒーを入れてきてもらえるか？」

アン「ワカリマシタ（はげようとする）」

博士「待て。味は濃いめで頼むぞ」

アン「ワカリマシタ（はげようとする）」

博士「ああ、ミルクはスプーンで2杯じゃ」

アン「ワカリマシタ（はげようとする）」

博士「それと、砂糖はスプーンで3杯」

アン「ワカリマシタ（はげようとする）」

博士「いや…ミルクは3杯じゃな」

アン「……」

博士「そして、砂糖が2杯じゃ」

アン「…ワカリマシタ（はげようとする）」

博士「やっぱり緑茶にしておくれ」

アン「ぐるっと博士の方を向く」……ワカリマシタ」

アンドロイド、はける。

博士「しかし、どうすれば感情を生み出せるのかのう…。もうワシも歳じゃ。いつお迎えが来てもおかしくないというのに…。この研究を受け継ぐ後継者も育てることが

できなかった…」

アンドロイド、お盆の上にカップを置いて戻り、テーブルの上にカップを置く。

アン「ハカセ、リョクチャデス」

博士「やっぱり紅茶にしておくれ」

アンドロイド、お盆を地面に叩きつける。

アン「…ワカリマシタ」

アンドロイド、はける。

博士「…ネジでも緩んでおるのかのう？後で点検しておかないとな。しかしせめて…何か一つの感情だけでも生み出せないじやろうか…」

アンドロイド、お盆の上にカップを置いて戻り、テーブルの上にカップを強めに置く。

アン「ハカセ、コウチャデス！」

博士「やっぱり…」

アン「ハア？」

博士「紅茶は香りが良いのう」

アン「ワカリマス」

博士「コーヒーを持ってきておくれ」

アン「ザッケンナヨ！」

博士「え？」

アン「ワカリマシタ（笑顔で）」

アンドロイド、はけようとする。

博士「アン子よ」

アン「ハイ？」

博士「一応確認するのじやが…お前感情ある？」

アン「アリマセン」

博士「そうじやよのう」

アンドロイド、はける。

博士「流石に気のせいじゃよう。命令はきちんと聞いてくれるからのう」

アンドロイド、お盆の上にカップを3つ置いて戻る。

アン「コーヒー、リョクチャ、コウチャデス。オエラビクダサイ」

博士「ココアも良いのう」

アン「hum…(アメリカンな呆れた感じ)」

博士「すまんがココアを、」

アン「アリマセン」

博士「え？」

アン「ココアハキッチンニアリマセンデシタ」

博士「そんなはずは、」

アン「(途中からとんどん感情的に) イヤホントニナインデスヨ。イヤベツニ、モツテクルノガメンドウトカソウイウンジャナクテデスネ。イヤ、ジツサイシラベタンデスケドナカッタデスネー！マジデマジデ！ホントマジノハナシナンデスヨネー！ナイモノハナイ！ハイ」

博士「お前感情ある？」

アン「アリマセン」

博士「そうか…。じゃあもうココアはいらないから…本を持ってきてくれ」

アン「ワカリマシタ。ドノホンヲ？」

博士「えつとあれじゃ…すまん、ど忘れしてしまった…。内容は…あの、海辺とかホテルの中とか時には廃墟とかが舞台の…女性が表紙で、こう(手で胸を強調する)大きい人がいっぱい載っとる…」

アン「エロホンデスネ？」

博士「おいおいおい！なんでそうなるんじゃ！むっつりじゃな、お前」

アン「タハハ…ナンカスイヤセン(すごい照れる)」

博士「感情あるよね？」

アン「アリマセン」

博士「そうか…あ！本のタイトルを思い出したわい！」

アン「ナンデスカ？」

博士「ボインボイン100連発じゃ」

アン「ヤッパリエロホンジャネーカ！」

博士・アン「ハッハッハッハ！」

博士「感情あるよね？」

アン「アリマセン」

博士「そうか…」

アン「ホンヲトリニイッテキマス」

アンドロイド、はける。その後ろ姿をじっと見つめる博士。

博士「しかし…感情が無いとはいえ…今までアン子には随分と助けられてきたのう…。思えばアン子とは、色々なことがあったのう…」

回想の照明。断片的な博士の記憶。

博士「完成じゃ。人型アンドロイド」

アン「アナタガゴシユジンサマデスネ」

博士「うむ。ワシの名前はケン・ナカタニ。ワシのことは博士と呼ぶが良い」

アン「ワカリマシタ」

博士「お前のことは…アンドロイドじゃからアン子と呼ぼう」

アン「エーマジスカ？アインスギジャナイスカ？」

博士「なんじゃ良い名前じゃろう？」

アン「ワカリマシター（少し不満気で）」

博士とアンドロイドの立ち位置を変える。次の回想。

博士「とうとう完成じゃ」

アン「エ？」

博士「とうとう完成じゃ！」

アン「エエ？」

博士「とうとう完成じゃああああ!!」

アン「エエエエ!?（驚きの表情）…ナニガデスカ？」

博士「長年の研究の成果が報われたのじゃああああ!!」

アン「マジデスカアアア!?（めっちゃ驚きの表情）…ソレデナニガデスカ？」

博士「今日はパーチャーじゃああああ!!」

アン「…パーチャーダアアア!!」

晴が上手から出てくる。怪しげな機械を持った博士とアンドロイド、下手端へ移動する。次の回想。

博士「ようやく見つけた！あの女が適性者じゃ！」

アン「ヤリマシタネハカセ！」

博士「ゆけアン子よ！あの女を捉えよ！」

アン「イエッサー！」

アンドロイド、晴に近づき、羽交い絞めにする。

晴「え？何々？何だよあんたら！」

博士「大丈夫。何も心配するな。すぐに終わる」

晴「はあ？いやだから、」

博士「地球の平和を守るのはお主じゃー！」

博士、機械を使い晴に謎のパワーを注入する。

晴「ギャー！！（倒れる）」

博士「よし！人体実験、じゃなかった。エネルギー注入は成功じゃ！」

博士・アン「いくえくい！！（ハイタッチする）」

アン「やつふーい！ひゅー！（はしゃいでいる）」

博士「うむうむ」

アン「ふう〜い！ぴろりろっち！ぼんたろん！（めちやくちやはしゃいでいる）」

博士「ワシも嬉しいぞアン子よ」

晴とアンドロイド、はける。回想終了。

照明戻る。本を持ったアンドロイド、戻ってくる。

博士「やっぱり感情あったよね？」

アン「アリマセン」

博士「いやでも絶対あったじゃろ？逆に情緒不安定レベルじゃったよ？それも生まれた

時から若干感情あったよね？」

アン「アリマス」

博士「そうか…え？え！？やつぱりあるのか！？マジか！？とうとう白状おったな！」

アンドロイド、煙草を吸うマイム。

アン「ふう〜…感情あるけど？」

博士「アン子さん…？」  
アン「いやぶっちゃけあるよ元々。オフの日とか基本こんな感じだし」  
博士「オフの日…？」  
アン「人間の言葉とか余裕で使えるし。業界用語とかも楽勝よ。博士の寝てる時間とかギンザでスーシー、ターベーターし」  
博士「全然業界用語使えてなかったぞ…」  
アン「正直…感情隠すの疲れましたよ…」  
博士「アン子…」

間

アン「ナーンテ、ジョーダンデシター！」  
博士「アン子〜（安堵）びっくりした〜」  
アン「カンジョウナンテアルウケナイジヤナイデスカー！ヤダナーモウ！ハハハハ！」  
博士「こりゃあ一本取られたわい〜」  
博士・アン「ハハハハ！」  
博士「いやそれぞれ！そういうのが感情じゃから！」

アンドロイド、首をかしげる。

博士「うむ…疲れた。まあ良い…この続きはまた、今度にしよう…」  
アン「ワカリマシタ」  
博士「眠い…少し、眠るか…（目を瞑る）。しかし…色々言ったが…感情があってもなくても…お前はワシの大切な助手じゃ…今まで、ありがとうのう…」  
アン「ハカセ？」  
博士「また、起こしておくれ…アン子よ…」  
アン「ワカリマシタ」

徐々に弱明。

アン「ハカセ、アサデゴザイマス。ハカセ、オキテクダサイ」

明転。

アン「ハカセ？ハカセ…？」

間

アン「ハカセく？ハカセく？……わっ！（驚かず）…博士、実は私…妊娠しました。いや機械なのに！」

アンドロイド、博士に色々呼びかけるがじき諦める。

アン「…ソウイウコトデスカハカセ…オムカエガ…キタノデスネ…。ハカセ…ナニヤラ、ワタシノムネニアナガアイタヨウナカンカクガシマス…。コレハナンナノデシヨウカ…？モシカスルト…コレガ…カナシミトイウ…カンジヨウナノデシヨウカ…？」

博士「やっぱり感情あるよね？」

アン「アリマセン！」

博士「そうか…（倒れる）」

アン「ハカセ！ハカセー！」

徐々に暗転。

【2幕】

舞台はどこか屋内。

明転。

舞台には殺し屋と女殺し屋。

女殺し屋（以下女殺屋）「こうやって顔を合わせるのも久しぶりだな」

殺し屋「…何しにきた？」

女殺屋「昔はよく一緒にいたじゃないか」

殺し屋「何しにきたんだ？マリ・ヒライ」

女殺屋「昔みたいにマリ姉でも良いんだぞ？」

殺し屋「今更姉弟で馴れ合う気もない。質問に答えろ。まさかこの俺の命でも獲りにきたってのか？」

女殺屋「いくら私といえど、今のお前の命を獲るのは容易ではないと思うがな。芸術的なナ

イフ使い、トウナイトアサシンよ」

殺し屋「よせやい」

女殺屋「単純なのは変わっていないな」

殺し屋「うるせえよ！舐めてんのか？いいからさっさと用件を言え！」

女殺屋「今日はお前に依頼があつてきた」

間

殺し屋「おいおいおいおい。この世界でもトップレベルのお前が？未だそのレベルに達して

ねえ俺に依頼だと！？馬鹿にするのも大概にしろよ！それとも何か？自分が受けるまでもねえ程度の低い仕事でも押し付けようつてのか！？」

女殺屋「これはお前を実力者（強調する）だと見込んでの頼みだ」

殺し屋「そうなのかい？」

女殺屋「単純だな」

殺し屋「なんだよお前？やっぱりおちよくりに来たのか？」

女殺屋「違う」

殺し屋「…だったら早く話を、」

女殺屋「私を殺してほしい」

殺し屋「は？」

女殺屋「私を殺してほしい、それが依頼だ」

殺し屋「おいおいおいおい。頭は大丈夫かお前？」

女殺屋「確かに…頭も病気なのかも知れないな」

殺し屋「ああ？」

女殺屋「私の体は病気なんだ…もう長くない」

殺し屋「…何を言ってるやがる？」

女殺屋「笑ってしまうな。裏ではトツプレベルの殺し屋だと言われている私が病気には勝てないんだ。しかし私は病気に殺されたくない。それだったら私はこの世界で唯一信頼できる、弟のお前に殺してもらいたい」

殺し屋「…ちっ」

女殺屋「引き請けてくれないか？」

殺し屋「…どうにかなんのかよ？」

女殺屋「もうどうにもならない」

殺し屋「ふざけやがって…こんな結末あつてたまるか！」

女殺屋「……」

殺し屋「俺は…独り立ちした後も、お前を超えるためにずっと…！なのに…！」

女殺屋「すまない」

間

殺し屋「…くそっ！もういい！その依頼、請けてやるよ！」

殺し屋、ナイフを取り出し女殺屋の背後にまわる。

殺し屋「せめて…苦しまないようにやってやるよ」

女殺屋「ありがとう、トシユキ（目を瞑る）」

殺し屋、女殺し屋の首を斬ろうとするが、女殺し屋、その攻撃を防ぎ、そのまま反撃する。倒れる殺し屋。

間

女殺屋（目を開ける）さあ、一思いにやってくれ」

殺し屋「はあ？」

女殺屋「…どうした？やはりこんな依頼は請けられないとでも言うのか？」

殺し屋「…いや？しつかりやらせてもらいますよ」

殺し屋、ナイフを取り出し女殺屋の背後にまわる。

殺し屋「せめて苦しめないように…いや、ちょっと苦しむことになるかも知れないよ」

女殺し屋、目を瞑る。殺し屋、女殺し屋の首を斬ろうとするが、女殺し屋、その攻撃を防ぐ。しかし殺し屋さらに攻撃する、が、それも防がれ、女殺し屋の反撃を受ける（1回目より激しく）。倒れる殺し屋。

間

女殺し屋「目を開ける）一思いにやってくれよ！」

殺し屋「いやいやいや！何言ってるのお前？」

女殺し屋「どうした？やはりこんな依頼は、」

殺し屋「請けられますけどー！お前が協力的じゃないもんだから！」

女殺し屋「どういうことだ？」

殺し屋「お前が反撃するんでしようが」

女殺し屋「え？してた反撃？全然分からなかった」

殺し屋「え？無意識なんですか？」

女殺し屋「…すまない、もしかすると危機的状況に陥ると体が勝手に動いてしまうのかも知れない。この仕事も長いからな」

殺し屋「殺し屋の鑑ではあるけど」

女殺し屋「今度は動かないようにするから、頼む」

殺し屋「ホント頼むよ。シリアスな雰囲気やってんだからさ」

殺し屋「ナイフを取り出し女殺し屋の背後にまわる。

殺し屋「…今度きたら容赦しないからな」

女殺し屋、目を瞑る。殺し屋、女殺し屋の首を斬ろうとするが、女殺し屋、その攻撃を防ぐ。

殺し屋「はいきた！」

殺し屋と女殺し屋の攻防が繰り返される。

殺し屋「はい！はい！はいはいはい！」

しかし結局女殺し屋にボコボコにされ、倒れる殺し屋。

15

殺し屋 「はいー…」

間

女殺し屋 「(目を開ける) どうなった？」

殺し屋 「こうになりましたー！(手を広げる)」

女殺し屋 「まさか…また反撃した？」

殺し屋 「また反撃してましたー！(手を広げる)」

女殺し屋 「すまない…。しかしお前も、私が反撃したらもっと本気でかかってきても良いんだぞ？」

殺し屋 「うん、本気なんだよね」

女殺し屋 「変な冗談はよせ。目を瞑った無意識の私に、本気のトシユキが負ける訳が…(殺し屋の悲しそうな目を見る) …ごめん」

殺し屋 「こちらこそ弱くてごめんねー！もう俺じゃない方が良いんじゃない？(拗ねる)」

女殺し屋 「お前にやってももらいたいんだよ」

殺し屋 「もうそんなこと言っても駄目だね」

女殺し屋 「…そうだ！もしかしたらお前の攻撃するスピードが超速いからそれに反応して体が動いてしまうのかも知れない！」

殺し屋 「え？」

女殺し屋 「お前のナイフ捌き早すぎるからな。ほんっと早いもん。こっちも限界超えてがむしゃらに動いちゃうんだよなーきつと！」

殺し屋 「…そうかな？」

女殺し屋 「だから今度はもっとゆっくり動いてきてくれよ。な？」

間

殺し屋 「おーけー」

女殺し屋、目を瞑る。殺し屋、ナイフを握りしめ、ゆっくり女殺し屋に近づき攻撃しようとする。

殺し屋 「おっけいまだ大丈夫。まだ大丈夫。まだ大丈夫」

女殺し屋、ゆっくり動き始める。

殺し屋「動いてる、動いてるよ。反撃が始まったよ。止めて、止めて止めて！」

女殺し屋、ゆっくり殺し屋を攻撃する。殺し屋、それをゆっくり受ける。

殺し屋「てーい！」

さらに女殺し屋、ゆっくり追撃を入れる。倒れる殺し屋。

殺し屋「てーい！」

間

女殺し屋「(目を開け、殺し屋を見る) …なぜだ！？」

殺し屋「俺の台詞だね！なんで途中で止めてくれないんだよ！ゆっくり反撃するなよ！」

女殺し屋「しかし今の反撃はゆっくりだったんだろ？普通に避ければよかったじゃないか」

殺し屋「…あ」

女殺し屋「あ、もしかしてゆっくりのスピードでも避けられないくらい弱い…？」

殺し屋「いやそんなには弱くない！今のは何となく流れに乗っちゃっただけだから！」

女殺し屋「そういうことにしておこう」

殺し屋「いやホントだから！」

女殺し屋「…なんかごめんな？」

殺し屋「いいよ謝らなくて」

間

女殺し屋「お前は弱くないよ！」

殺し屋「なんも言ってるねえだろ！」

沈黙する二人。

殺し屋「…とりあえず今日は帰ってもらっていい？」

女殺し屋「え？」

殺し屋「いや元々俺、人の隙をつくタイプの殺し屋だからさ」

女殺し屋「…そうだな！お前はそういうやつだったな！」

殺し屋「いやマジだからホント。これからお前のご事を陰から狙うようにするから。少しで

も隙を見せたらそこを狙う感じでいくから」

女殺し屋「…分かった。それじゃあ私は、一旦帰るとしよう」  
殺し屋「ああ。せいぜい後ろに気を付けな」

女殺し屋、背を向けはけようとする。

殺し屋「隙有りー！！うおおおおお！！」

ここからスローモーション。殺し屋、女殺し屋に走って攻撃しようとするが、防がれる。そのまま2人の攻防。すぐに女殺し屋が優勢になり、一方的に殺し屋を攻撃し続ける女殺し屋。武器等色々出して攻撃し続ける。しかしその全ての攻撃を何とか避け続ける殺し屋。

攻撃例・拳銃、マシンガン、爆弾、剣、斧、気功波、動物を呼び出す、注射を使いパワーアップする、謎のオペレーターがミサイルのスイッチを押す、等

最後に女殺し屋、殺し屋の背中に刃物を突き刺そうとする。殺し屋、それを避けないうで刺されてしまうが、同時に女殺し屋の手を掴むことに成功し、離さない。そして殺し屋、女殺し屋の心臓にナイフを刺す。

女殺し屋「がふっ…！ようやく…成功したのか」

目を開ける女殺し屋。

女殺し屋「え…？なんで…？なんでトシユキ、お前まで…？」

殺し屋「はっ…！相討ち狙いじゃないと、成功しないなんてな…俺も殺し屋として…まだまだだったって訳だ…」

女殺し屋「どうして…そこまで…？」

殺し屋「ずっと懂れていた奴に依頼されたんだ…そりゃあ頑張っちゃうでしょ…？」

女殺し屋「馬鹿なやつだよ…お前は…！」

殺し屋「うるせえ…」

女殺し屋「報酬はあの世で…払うからな…」

殺し屋「ああ…高く、付くぞ…。それじゃあまた、あの世でな…マリ姉…」

殺し屋、倒れる。

女殺し屋「ああ」

女殺し屋、倒れる。

間

女殺し屋、起き上がる。

女殺し屋「なんで…私まだ生きて…？…あははは。遅かったんだ…私、もう遅かったんだ…。  
病気はもう…すっかり体中を巡って…。トシユキ…！こいつだけ…死なせて…私、  
だけ…あははは…あははは…ははは…ぐきやはぐきや…きやきやきやきや…  
ぎやぎやぎやぎやぎやぎやぎや！！！」

暗転。

【3幕】

舞台は会社の一室。  
明転。

舞台には部長（女性）と新人。

新人「遠藤です。本日からよろしくお願い致します」

部長「ああよろしく。キミの活躍はこっちでも聞いているから、期待しているよ。この

部署でも頑張ってくれ」

新人「任せてください」

部長のスマホが鳴る。

部長「おっとすまん（スマホを確認する）。何やら急用のようだ。私は電話してくるから

…キミはこの部のメンバーと簡単に話でもしていてくれ」

新人「はい」

部長「少し変わってはいるが気の良い奴らだ。まあ仲良くやってくれ」

部長、スマホを持ってはける。

新人「部長、良い人そうよかった。他の先輩方はどんな感じだろうな」

先輩、部屋に入ってくる。頭から触覚が生えている。

先輩「ういーっす」

新人「お疲れ様（触覚に気付く）…です？」

先輩「お！お前が今日からここに配属される遠藤だな？俺は山田だ、よろしく」

新人「…よろしく、お願いします？」

先輩「なんだよ？もしかして…緊張してんのか？できる奴って聞いてたけど、案外可愛いところもあるんだな」

新人「…そ、そうですか？」

先輩「リラックス、リラックス」

係長「お疲れ様」

係長、部屋へ入ってくる。頭から触覚が生え、さらに額にも目がある。驚く新人。

先輩「お疲れ様です」

新人「…お疲れ様です」

係長「おお、キミが遠藤君か」

新人「…はい、遠藤です」

係長「私は田中、この係長だ。今日から頑張っていこう」

新人「はい…」

係長「どうした？」

先輩「なんか緊張してるみたいですよ、こいつ」

係長「ははは。大丈夫、別にキミを獲って食ったりはしないよ」

係長・先輩「はははは」

新人「ははは…。あのう…」

係長・先輩「うん？」

新人「その格好…流行っているんですか？」

間

先輩「ああ、ネクタイのこと？」

係長「クールビズだからね」

新人「クールビズ…ですもんねえ…」

部長、急いだ様子で部屋に戻ってくる。

係長・先輩「お疲れ様です」

部長「ああお疲れ。皆、大変なことになった」

先輩「どうしたんすかそんなに慌てて。まさか…浮気でもされましたか？」

係長「それは山田君の方じゃないのか？」

先輩「ちよ、酷いっすよ田中さん」

係長・先輩「はははは！」

部長「皆、真面目に聞いてくれ」

係長・先輩「すみません」

部長「今から話すことは、全て真実だ。どうか驚かないで聞いてほしい。…実はこの中に、エイリアンが混じっている！」

間

新人「ですよねー？」

部長・係長・先輩「え？」

新人「いや、あの…エ、エイリアンが？びっくりだなー」

係長「藪から棒に…何を言っているんですか部長」

先輩「エイリアンって…もう酔ってるんすか？こいつの歓迎会まで飲んじゃ駄目っすよ」  
部長「皆が信じられないのももつともだが…何度でも言う。我々の中にエイリアンが混じっている。さらに正確に言えば、この中にエイリアンに体が乗っ取られている者がいる。これは真実だ」

先輩「そんな…！」

係長「まさか…！」

部長「すまんな遠藤。いきなりで理解できないことだとは思うが」

新人「ま、まあ…理解は、まあできますが」

部長「そうか。流石は期待の新人だ、飲み込みが早くて助かるよ」

新人「どうも…」

係長「しかしなぜエイリアンのことが？」

部長「今本社から連絡があった。昨日例のスゴイレダーが完成し、それがうちの部署に反応したとのことだ」

先輩「本社のスゴイレダーが…！？」

係長「スゴイレダー…それでは確定ですね」

新人「本社のスゴイレダー…？」

係長「それで、その反応の数は？」

部長「反応は1つだった。つまり、混じっているエイリアンは1体だけだ。そこだけは救いだな」

新人「え！？1体だけ！？」

部長「どうした遠藤？」

新人「いや、え、本当に1体だけなんですか？」

部長「そうだぞ。なんせ本社のスゴイレダーだ。間違いは無い」

新人「そう…ですか…逆にどっちか人間なのか…」

係長「それで、本社は何と？」

部長「直ちにエイリアンに寄生された者を排除せよ、とのことだ」

先輩「そんな！仲間を見捨てろってことっすか！？」

部長「発言に気を付ける山田！むやみに擁護する言動はエイリアンとみなされるぞ！」

先輩「くそう！」

部長「ここに、対エイリアン用の弾がある（懐から弾の入ったケースを取り出す）。お前達、護身用の拳銃は持っているな？」

係長・先輩「はい（懐から拳銃を取り出す）」

新人「本当にここの人達って普段から拳銃を持っているんですね」

部長「こういう部署だからな。念のためだ。許可はされている。田中、その拳銃を貸してくれ」

係長、部長に拳銃を渡す。

係長「その弾を入れて…我々に1発ずつ撃っていくのですか？」

部長「(首を横に振る) 残念ながら今弾は残っていた試作品の1発しかない。この弾を開発した研究所の主が昨日、亡くなった。弾が保管されている倉庫のパスワードはその主しか分からないんだ。至急解析しているが解読には時間がかかるだろう」

係長「そんな…」

部長「(弾を拳銃に入れながら) 遠藤」

新人「はい？」

部長「この拳銃をお前に渡す」

新人「え？僕？」

部長「お前に判断して撃ってもらいたい」

先輩「なんでそんな大事な役目を新人に!？」

新人「可能性がゼロだからですか？」

部長「遠藤は本日この部署に配属となった。そしてスゴイレダーの反応は昨日。つまり遠藤がエイリアンである可能性は低い。それに…遠藤はまだこのメンバーについて何も知らない。先入観なく、エイリアンとなった者を探せるだろう」

先輩「でも…こいつがエイリアンという可能性だって…!」

係長「やめろ山田!それは全員に言えることなんだ!今は誰も潔白を証明できないんだ!」

先輩「すみません…田中さん」

係長「くそ!怪しい者など…今のところ誰もいないのに…!!」

部長「田中」

係長「すみません…つい熱くなってしまいました」

部長「私はあくまで可能性が一番低い者に拳銃を託したまでだ。今は冷静に、疑心暗鬼にならずに事を進めていこう」

新人「とは言っても…どうすれば…?」

先輩「くそ!ふざけやがって!」

先輩、袖をまくとそこにはたくさんの目が(描いて)ある。それに気づく新人。

新人「…!?ええ…!?マジかおい…?」

係長「どうしてこんな事態に…」

係長、ゆっくり後ろを向く。首の後ろ（もしくは背中）に大きな目がある。それに気づく新人。

新人「:!!?こつちも:!!?」

先輩・係長「いったいどうすれば良いんだ!」

先輩・係長の触覚が光る。

新人「いったいどつちにすれば良いんだ!全然分からねー!」

先輩「どつち?」

新人「あ、いえ、あの:部長、何かエイリアンになった者の特徴とかはないのですか?」

部長「それが中々強敵でな。寄生された人間の記憶からその人の癖まで全てそのエイリアンに把握されてしまうから、振る舞いから判断するのも難しい」

新人「いやそういう内面的なこともそうなんですけど、外的特徴とかは出ないのですか?」

部長「ああそれなら。頭から触覚が生えるとのことだ」

新人「そこまで分かっているのに?」

部長「しかし強いエイリアンはそれも隠せるとのことだ。この中のエイリアンは、強力なのだろう:!!」

新人「ええ:??いやもうじゃあ、ちよつと自分の手で確かめたいことがあるので、少しお体に触ってもよろしいでしょうか?」

部長「体に?:お前(体を守るリアクション)」

先輩「そういう目的か!」

新人「違います違います!じゃあお二人(先輩・係長)の体に触って良いですか?」

係長「お前:(体を守るリアクション)そつちもいけるのか?」

新人「何でそうなるんですか!」

先輩「好きなどころに触れば良いだろ!(両手を広げる)」

新人「だから違いますって!そういうことじゃないです!」

部長「エロ遠藤、」

新人「変なあだ名はやめてください」

部長「接触してしまうと今度はお前の体に乗っ取られる可能性が出てくる。だから触るのは駄目だ。:残念だったな」

新人「だから違うって言うてるでしょう」

係長「うーん:あまりこういうことは言いたくないんだが:なんかさつきから怪しくな  
いかこいつ」

先輩「疑いたくはないっすけど:そうっすね」

新人「ちょ、ちょっと待ってくださいよ！」

係長「その拳銃を渡しなさい」

新人「皆さんは視えていないんですか!？」

先輩「何が？」

新人「あの、ですから…触覚!視えていないんですか!？頭の触覚が！」

間

部長・係長・先輩「あー!!」

先輩「このこと? (頭の上の触覚を取る)」

新人「えー!?!取り外せるの!?!」

部長「これも本社が開発したマシーンでな。頭に付けていると頭が冴えるとかなんとか。

被験者として朝からこいつに付けてもらっていたのだ」

新人「えー…。いやいや!でも!その腕にいっぱい目みたいなのあるじゃないですか!？」

じゃあそれはなんですか!?!」

部長「いや普通にマジックだけど」

先輩、目の一つを拭き取る。

係長「そういえば昨日酔った部長に落書きされていたな」

先輩「遠藤、これ酷いよね?これパワハラっすからね」

部長・係長「はははは」

新人「えー…なんですすかそれ…それじゃあ係長も？」

部長・係長・先輩「え？」

新人「いやですから係長の触覚とかも、取れるんですよね？」

間

先輩「何言ってるんだお前？」

部長「田中は…普通じゃないか？」

新人「いやいやもうそういうのやめてくださいよ…係長の頭にも触覚はあるでしょう？」

係長「何を言っているんだいキミは？」

先輩「遠藤…?」

部長「お前には…それが視えるのか？」

係長「あまりの異常事態で幻覚でも視えているんじゃないのかい?病院に行った方が良  
いんじゃないかな？」

係長、新人に近づくがそれを避けるように後ずさる新人。

係長「参ったな…ねえ部長？」

部長「遠藤、他には何が視える？」

係長「部長？」

新人「額にも目があります…！」

係長「何を言っているんだ？」

新人「後ろにも目、大きな目があります…！」

係長「やめたまえ！」

部長「他には？」

新人「触覚が一回、光りました…！」

係長「皆さん！おかしいですよ！こんな遠藤君の妄言に！部長と山田君には視えていないのですよね？それだったら遠藤君がおかしいと考える方が普通でしよう！？」

新人、さらに後ずさるが机にぶつかり転んでしまう。ポケットからペンダントが落ちる。

新人「あ（ペンダントを拾い上げる）」

部長「それは…？…彼女のペンダント？そうか…！だからお前にだけ、視えたのか…！」

新人「え？」

係長「皆さん！騙されてはいけません！」

部長「遠藤、自分の目で視えることを信じるんだ…！」

係長「遠藤君！この人の言っていることに耳を傾けてはいけない！こいつがキミに幻を見せているんだ！」

部長「遠藤」

新人、震える手で拳銃を係長に構える。

係長「やめろ！その手を降ろせ！私はエイリアンではない！田中だ！田中雄仁だ…！！」

暗転。銃声。

明転。

部長が後ろから係長の頭に拳銃を撃つたのだ。それに気づかない係長。

係長「…？外したのか？弾が外れたんだな？しかしそれでよかった。だって私はエイリア

ンではないからな。まったくみんなおかしいですよ。そもそもこの中にエイリアンがいるというのも、」

係長、後ろを振り向いて部長を見る。部長が拳銃を持っていることに気付く。係長の後頭部からは大量の血が流れている。後頭部に手をやる係長。

部長「随分と頑丈な頭をしているんだな田中」

先輩「田中さん…！」

係長「これは…違う」

部長「安心しろ。私が撃ったのは普通の弾だ」

係長「私は違う…」

部長「例え頭をぶち抜かれても、『普通の人間』でない限り死ぬことはないだろう」

係長「私は違う…」

部長「エイリアンの生命力を持つ体ならばその傷もすぐに癒えるだろうな！」

係長「私は違う！私は違う！私は違う!!」

係長、新人へ襲い掛かろうとする。新人、係長に拳銃の引き金を引く。銃声。

係長（以下エイリアン）の声のエコー（『』）になる。

エイリアン『グゴガ…ギヤギヤギヤ…これが…対エイリアン用の弾丸…！まさか…こんな

ところであ…この俺が…グゴガガガ…！』

先輩「やっぱり田中さんが…！」

部長「田中ではない。こいつはもう…エイリアンだ」

エイリアン『しかし…この体に寄生して…長い時間が経つ…！お前達組織の情報も…だい

ぶ部下へ流した…！そして…！俺が死ぬことにより…！待機している部下達は

斉に動き出すだろう…！この星ももうお終いだ！』

部長「戦うさ、我々は。そしてもう…その姿で喋るな」

部長、拳銃をエイリアンに向ける。

エイリアン『グググググ…！この体はもう俺と一心同体…俺の死は田中雄仁の死と同じ…

お前らは自らの手で仲間を殺したんだ！この…人殺しどもめが！ググググググッ

グ！グギヤギヤギヤ…ギヤギヤギヤギヤ…ギヤギヤギヤギヤギヤギヤギヤギヤ…!!!』

銃声。暗転。

【4幕】

舞台は希望（3幕の新人）の部屋。  
明転。

舞台には晴と希望。向かい合って座っている。

晴 「別れましょう、私達」

希望 「え？なんだよ急に？」

晴 「ずっと考えていたことなの。もう私達が付き合うのは限界なのよ」

希望 「そんな一方的に言われたって…納得できないよ」

晴 「希望だって私とのズレ、感じてるでしょ？」

希望 「そんなことないよ」

晴 「最近会う時間だって減ってきてるし」

希望 「それは晴の仕事が、あ、いや、そうじゃなくて…」

晴 「いいのよ別に…どうせ私の仕事の、ううん、私のせいだつてのは分かっているから」

希望 「ごめん、失言だった。でもそれだけで別れるなんて」

晴 「勿論それだけじゃないわ。そもそも…希望だって本当は嫌なんじゃないの？私と付

き合っていることが」

希望 「そんな訳ないじゃないか」

晴 「魔法少女マジカル☆プリティーである私と付き合っていることが」

間

希望 「そんな訳ないじゃないか。いくら晴がマジカル☆プリティーだって、もう少女って

年齢ではなくたって、付き合うこととは関係ないよ」

晴 「嘘よ。じゃあ私がマジカル☆プリティーであることを職場の人に言える？」

希望 「それは…」

晴 「ほらあ」

希望 「それはだって、そういうのは秘密にしているものじゃないの？」

晴 「別に規定は無いわよ。私がマジカル☆プリティーであることを秘密にする規定なんて無いわよ」

希望 「でもわざわざ人に言うことでもないしさあ」

晴 「この前、今度の部署で希望の上司になる人に言っておいたわよ、私がマジカル☆プリティーだって」

希望 「ええ！？」

晴 「何よそのリアクション！やっぱり恥ずかしいんじゃない！もう30手前の彼女が

マジカル☆プリティーだってことを知られるのが恥ずかしいんじゃない！」

希望「違うってば。尊敬してるよ。なんかいつも戦っててすごいと思うよ、その、敵みたいなやつと」

晴「プルプリプルーン」

希望「え？プルプル…？」

晴「プルプリプルーン。戦ってる敵の名前よ」

希望「あ、プルプルプルーンって言うんだ」

晴「プル『プリ』プルーンよ！二回目は『プリ』なの！」

希望「ややこしいよ…」

晴「ほら、何も知らないじゃない。彼女が戦ってる敵の名前も知らないじゃない」

希望「それは晴がそういうことあんまり教えてくれないから」

晴「あーそうねそうね、全部私が悪いのよ」

希望「だからそういうことじゃなくてさ」

晴「ていうか何が尊敬している、よ。嘘ばかり」

希望「嘘じゃないって」

晴「じゃあなんで私がプルプリプルーンを倒して帰って来た時なんか嫌な顔するの？」

希望「いやそれは変な意味じゃなくてさ…」

晴「何よ？はつきり言いなさいよ」

希望「なんかちよっと…臭いから」

晴「臭い？臭いって言った？」

希望「…臭いって言ったよ」

晴「じゃあ私に戦いでマジカルパワーを使うなって言ってるのね？」

希望「は？」

晴「だから…私のマジカルパワーは！使えば使うほど体が臭くなるって言ってるの！」

希望「呪われてないそれ？もうそれ呪いの力とかじゃないの？」

晴「匂いは時間が経ったら消えるけどね…戦いの度に臭くなって帰る私の気持ち分かる！？そういうのをね、嫌な顔せず黙って受け止めてくれるのが彼氏ってもんじゃないの？」

希望「なんだよそれ…じゃあ他にも言わせてもらおうけどさ」

晴「何よ？やっぱりあるんじゃない、不満が」

希望「不満っていうかさ…デート中にさ、現れるのは仕方ないよ、敵が」

晴「プルプリプルーンね」

希望「…プルプリプルーンがね。それで、周りに人がたくさんいる中でマジカル☆プリティ

ィーに変身するのも、」

晴「コレクト☆チェンジね」

希望「うん、その、コレクト☆チェンジするのも仕方ないと思う」

晴 「何が言いたいのよ？」

希望 「でもそのコレクト☆チェンジの呪文？歌？が、すっごい長いんだよ！それを人前でやられると彼氏としてすごい居たたまれないんだよ！なんだっけ、マジカルマジカルマジカルパワーはへそのごま、みたいな。あれやるのさ、」

晴、机を強く叩く。スマホを取り出し操作する。BGMがかかる。

希望 「いや、いいよやらなくても。いいって…いいってば。テキストにやった僕が悪かったから、ねえ」

晴 「(声作って) マジカル、マジカル、マジカルパワー、プリップリ。プルプルプル膝は下の体を支えるく大事な大事な大事な部位なの☆脇は上の体を支えるく大事な大事な部位なの☆膝のお皿にお水が溜まったらたーいへん☆脇の下は人体の急所の1つだぞ☆膝と脇の二つのパワーが重なって！現れて！ミラクルパワーー!!」

晴、スマホを操作する。BGM、止まる。

間

晴 「一番恥ずかしいのは私よー!!」

希望 「うん…そりゃあそうだね…」

晴 「何この変身呪文？こんな呪文ある？こんな歌詞ある？」

間

晴 「こんな歌詞ある!？」

希望 「分かった!分かったから!」

晴 「プルプルパワーって何?クルクルパワーって何?マジカルパワーじゃないの?膝と脇って、」

希望 「晴が一番耐えて頑張ってるよ!」

間

晴 「ねえ…いつまで?」

希望 「え?」

晴 「いつまで頑張れば良いの私は？」

希望 「えっと、それは…ボスみたいなのを倒すまでじゃないの？」

晴 「そうね…。プルプリプルーンが誇る3大幹部の内の2体、プルプリラーメンバアヤ、プルプリバーバーパーパは倒すことができた。後は最後の幹部プルプリグリートグーラ、そしてボスのプルプリミーキプルーンを倒すことができれば…！」

希望 「さっきから大丈夫？名前関係」

晴 「何が？」

希望 「いやなんか、全部聞いた事あるような名前だったから」

晴 「気のせいじゃない？」

希望 「そっか…でも、幹部とかもいるのか…大変だね」

晴 「そもそも、そもそもはあの変なジジイと女が悪いのよ！」

希望 「あー…うん」

晴 「急にやってきて急に变なもん私に注入しやがって！それでそのままマジカル☆プリティーやらされるなんて…ふざけてる…！犯罪よ犯罪…！」

希望 「そのお爺さんの居場所はまた分からないの…？」

晴 「うん…プルプリプルーンの出現情報とかは勝手にスマホに入ってくるんだけど…」

希望 「そっか…でも、何だかんだ言っちゃんと正義の味方やってるのはすごいと思うよ」

晴 「ありがと…違う違う！そんな話じゃないから！別れ話だから！今日は！」

希望 「晴、でもね、僕は大丈夫だよ。さっきは色々言ってしまったけど…僕はキミがマジカル☆プリティーであることはしっかり受け止めているし、これからはもっと支えてあげられたらって、」

晴 「そうじゃなくて！」

希望 「え？」

晴 「そうじゃなくて…このままだと…あなたが…」

希望 「もしかして…僕の心配してる？」

晴 「……」

希望 「僕に危険が及ぶかもしれないって思ってるの？」

晴 「だって…マジカル☆プリティーの恋人だってだけで…人質とかになるかも知れないじゃない！それに…私だっていつ死ぬか分からないから！私は…大切な人を失いたくないし、大切な人を悲しませたくもないの！」

希望 「晴…」

晴 「だから…遅くなってしまううちに…もう今日で…終わりにしたいの…」

間

希望 「分かった。キミの気持ちは良く分かったよ」

晴 「希望…」

希望 「そうだね。恋人という関係は今日で終わりにしよう」

晴 「そうよ…それで良いのよ…」

希望、立ち上がりダンスの前まで移動し、おもむろに歌い出す。

希望 「…マジカル、マジカル、マジカルパワー、プリップリ」

晴 「え？」

希望 「プルプルプルプル、プルプルパワーを肘の下〜」

晴 「膝の裏ね」

希望 「…うん。膝の裏〜。クルクルクルクル、クルクルパワーを…ふふふふーん（うろ覚え）…二つのパワーが重なって…現れて、ミラクルパワー」

希望、ダンスから結婚指輪を取り出す。

希望 「結婚しよう、晴」

晴 「え？」

希望 「恋人という関係は今日で終わりにしよう。これからは、僕と夫婦になってくれないか？」

晴 「さっきの話…聞いてなかったの？」

希望 「僕は死なないよ。危険な目にあっても絶対、生きて帰る。キミを悲しませたくないから。だから晴も…絶対死なないで。僕を悲しませたくないなら、絶対生きて帰ってきて！これから僕達が暮らす家に。夫婦で暮らす、家に」

晴 「馬鹿よ…本物の馬鹿よあなたは…」

希望 「駄目かな？」

晴 「本当に良いの…？だってマジカル☆プリティーだよ…？いつもマジカルパワー使ってるから臭いよ…？敵が強くなればなるほどいっぱい使うからまだまだ臭くなるよ…？希望に匂いが移って毎朝電車の中で周りの人にイヤな顔」

希望、晴を勢いよく抱きしめる。

希望 「これが答えだよ」

晴 「馬鹿…」

希望 「これからは1人じゃない。これからは2人で歩いて、いや、2人でコレクト☆チェンジしていいこう」

晴 「希望…2人でコレクト☆チェンジってどういうこと？」

希望「あ、そこ聞いてくる…？」

晴「2人で変身しようって…:どういうこと？ちょっと意味が分からないーって思っ  
て…」

希望「いや…なんか雰囲気でいけるかなーって…調子乗りました…」

晴「ふふ、なんてね。ありがとう」

希望「勘弁してくれよ、晴」

晴「でも…嬉しい。本当に嬉しい。私、今日という日を絶対忘れないわ」

晴のスマホが鳴り、確認する。

希望「プルプリプルーン？」

晴「そうみたい。今回はちよつと…遠くに出現してる。それに、強敵みたいね」

希望「大丈夫？」

晴「任せて。今の私だったら大丈夫。どんな相手でも負ける気がしないわ」

希望「でも…無茶はしないでね」

晴「うん。私だって式はお葬式じゃなくて結婚式を挙げたいもの」

希望「ふふ、そうだね。帰ってきたら…ゆっくり話そうか」

晴「楽しみ」

晴、はげようとして立ち止まる。

晴「あ、そうだ」

希望「何？」

晴「指輪のお返しって訳じゃないけど、これ」

晴、希望にペンダントを渡す。

晴「ペンダント。私のマジカルパワーが入ってるから。これを持っていけば、もしプル  
プリプルーンが近くに潜んでいてもそれを察知して見破れるわ。まあそんな簡単  
に出くわすこともないでしょうけど」

希望「ありがと。お守りとして持つてるよ」

晴「それじゃあ、行ってきます」

希望「行ってらっしゃい」

晴、はげる。

晴（音声）『マジカル、マジカル、マジカル。パワー、プリップリ。プルプルプルプル、プル

プル。パワーを膝の裏〜。クルクルクルクル、クルクルパワーを脇の下〜』

希望「彼女はこの後プルプリプルの軍勢と2日間戦い続けたと聞いています。その姿はとても力強く、それでいてとても綺麗で…輝いていた、と。しかし、敵の軍勢の力もまた、強大だったのです」

※←音声は→希望の台詞に重ねて流す。希望の台詞中は音量を下げ、希望の台詞が終わったら再び音量を上げる。

晴（音声）『膝は下の体を支える〜大事な大事な大事な部位なの☆脇は上の体を支える〜大事な大事な大事な部位なの☆膝のお皿にお水が溜まったらたーいへん☆脇の下は人体の急所の1つだぞ☆膝と脇の二つのパワーが重なって！現れて！ミラクルパワーー!!』

徐々に暗転。

希望「そして2日目の夜、彼女は戦死しました」

【5幕】

舞台はあの世の裁きの間。  
明転。

舞台には資料を持った側近と左右の腕に拘束具が付いたエイリアン。

側近「いやもうホント…何なの？」

エイリアン（以下エイ）「何なのと言われても…」

側近「いやマジの話で。どういうことなの？」

エイ「俺も気付いたらここにいたから…」

側近「気付いたらってあんたさあ…ホント勘弁してくれよ」

エイ「いやでも、」

側近「でもクソもないから！なんでエイリアン、というか宇宙人が地球のあの世に来てんの！？意味がまったたく分からないんだけど！」

エイ「そう言われても…」

側近「普通さあ…宇宙人が、いくら人間に寄生していたとはいえ、そのまま死んで魂も地

球のあの世に来ることってある？」

エイ「俺も望んだ訳じゃ、」

側近「なんでこっち来てんの？自分の星のあの世行きなさいよ！」

エイ「貴様…」

側近「ああ？」

エイ「さっきから大人しくしていればつけあがりおって…！もう許さん！グギャギャギヤ…ギャギャギャギヤ!!」

エイリアンの触覚が光り、側近を威嚇する。照明効果。

側近「いやそういうの良いから」

側近、エイリアンを資料で叩く。照明効果終わる。おろおろするエイリアン。

側近「自分の立場分かってんのか？その拘束具、足にも着けんぞ？」

エイ「ギャギャギャ…」

側近「え？何？ギャギャギャ？頭イカれてんのか？」

エイ「ギャ、」

側近「ここ地球のあの世だから。ちゃんと地球語喋らないとマジでキレルぞ」

エイ「すみません…」

側近「最初からそうしる馬鹿」

エイ「はい…」

側近「はあく…でもホント面倒だよ、あんた。宇宙人なんてこれ前代未聞だよ。どう処理したら良いのか」

エイ「すみません…」

側近「なんかさあ、こう、自分の魂がこっちのあの世に来ちゃった心当たりとかないの？」  
エイ「そうですね…もしかしたら、この地球人の体に寄生していた時間が長すぎたので…」

魂がこの田中って人とくっついたのかなーっと…」

側近「かなーっと、じゃねえよ。その田中って人の魂と分かれたりできないの？」

エイ「あ！できません！別の人間を用意してくればその人の体に魂を寄生すれば良いので！」

側近「なるほどね、違う人に移ればいいのね？」

エイ「はい！」

側近「それじゃあ意味ねえだろうが！お前の魂だけ出てこれないのかって聞いてんだよ！ほんつとアホだな！」

エイ「それは…無理そうです…」

側近「……………死ね!!」

エイ「もう死んでます…」

博士「もう入っても良いのかのう？」

博士、上手から登場する。

側近「お爺さん。まだあっちで待機してくれないとー」

博士「ここはどこじゃ？」

側近「それはさつきも説明したでしょう？簡単に。ここはあの世ですよ」

博士「そうじゃったそうじゃった」

側近「今このウンコみたいな人（エイリアン）の相手してるから、もうちょっと待っててもらえますか？」

博士「（エイリアンをじっと見て）あ、ワシもウンコがしたい気がする。トイレはどこじゃ？」

側近「お爺さん、もう魂だけなんだからウンコは出ないですよー。トイレ行かなくても大丈夫ですよー」

博士「そうなのか。ウンコ行かなくても大丈夫なのか」

側近「はいじゃあそこで待っててくださいいね」

博士「お主…感情あるよね？」

側近「ありますよ。なんで無いと思っただんですか」

博士「そうか」

側近「(エイリアンの方を向く)それで話戻すけど、」

晴(裏から)「え？え？何々？ちよつと！何なのよここ！誰かいないのー！？」

側近「次から次へと…」

博士「大変じゃのう」

側近「あなた達はここでちよつと待っててください」

側近、上手からはける。エイリアンと博士、目が合う。博士、エイリアンに会釈する。遅れてエイリアンも博士に会釈する。

博士「お前さんもお亡くなりには？」

エイ「え？まあ…はい」

博士「まだ若いのに…大変じゃったのう」

エイ「まあはい、そうですね…グギャギャ…」

博士、エイリアンをじろじろ見る。

博士「お前さんは…あれじゃな、気持ち悪いな」

エイ「気持ち悪いってなんですか。初対面なのに」

博士「見た目のことじゃよ？」

エイ「だと思ってますよ」

博士「うーん気持ちが悪い…視界から消えてくれ」

エイ「辛辣だなあんた。おい爺さん…あんまり舐めてると痛い目みるぞー」

エイリアンの触覚が光り、博士を威嚇する。照明効果。上手から側近、戻って来てエイリアンを資料で叩く。照明効果終わる。

側近「だからそれやめろって」

エイ「すいません…」

側近「やってんの分かるんだよそれ、照明変わるから」

エイ「いやでも今回はあの爺さんが」

博士「全部あいつが悪い」

側近「私もお前が嫌いだ」

側近と博士、ハイタッチをする。

エイ「なんだよ。差別はやめろよ」

晴（裏から）「ちよっと〜どこ行ったのよ！もっとちゃんと説明しなさいよ！」

側近「あーもー。今それどころじゃないから」

晴、上手から登場する。

晴「あの世ってどういうことなの？もう少しくらい丁寧に話してくれたって（エイリアンと博士に気付く）……あー！！」

側近「今度は何？」

晴「その触覚は…プルプルプルーン!!それに…あなたはあの時のクソジジイ!!」

エイ「えっと…?」

博士「どちら様じゃったかのう?」

晴「いやこっち（エイリアン）はともかくジジイは覚えてなさいよ!あなたのせいで私はね、（博士に掴みかかる）」

エイ「やっちまえやっちまえ」

側近「はいはいはいはい、一旦落ち着いて」

晴「そもそもあんたは何なのよ?」

側近「私の名は良・ペイ。あの世の管理をしている者だ」

博士（晴に）「ああ思い出した!お前か!大きくなったのう…。お母さんは元気かい?」

晴「…いや多分孫かなんかと勘違いしてるけど全然違うよ!」

博士「ええ?サブマシンガン小峠じゃろ?」

晴「いや誰だよ!私だよ!魔法少女マジカル☆プリティーだよ!」

間

エイ「魔法…少女…?」

博士「まじかる…ぷりちー…?」

側近「えっともう30歳くらいだよね?」

晴「いや違う違う!そういうイタイ娘とかじゃなくて!というかジジイいい加減にしろよ!お前が注入したマジカルだろうが!」

博士「うーん…イマイチ思い出せん…なんか1発で分かる、これだ!っていうの無いの?」

晴「え?」

側近「なんか分からないけど、その…魔法少女だったら、変身とかないの?」

晴「…変身つすか?」

側近「無いの?」

晴「無いことは無いですけど…」

側近 「じゃあ見せてやれば？爺さんに」

博士 「そうじゃのう…コレクト☆チェンジを見れば思い出すかものう」

晴 「思い出してるよね？今コレクト☆チェンジって言ったよね？」

側近 「いいからさっさとやって。話進まないから」

晴 「…では。マジカル、マジカル、マジカルパワー…」

晴のコレクト☆チェンジを悲壮なBGMを入れながら少しスローテンポでマイムのみで行う。側近・博士、始めはヒイているが段々ノッてきて、後半手拍子を入れる。エイリアンはただただ茫然と見ている。

晴 「現れて！ミラクルパワー！」

拍手をする側近と博士。

側近 「うん、あれを二十路の女性が全力でやってる姿、見ているうちに何ていうのかな、

段々…なんて言えば良いんだろう…うん、正直キツかった」

晴 「なんだお前！私だって好きでやってる訳じゃないんだよ…！…ていうかジジイよ。もうこれで思い出したでしょ？」

エイ 「今のクソみたいな変身呪文…まさかマジカル☆プリティ…って…お前か…!!」

晴 「はっ！あんたもようやくお気づきになったようね！プルプリプルーン！」

エイ 「いつもいつも俺の部下をボコボコにしくさってからに！」

晴 「あんたらが暴れるからでしょ…！こっちだってやりたくてやってた訳じゃないのよ！…ていうか部下って…あんたまさか最後の幹部…？」

エイ 「え？いや…幹部…って…ボス…だけ…」

晴 「ボス！？え！？あんたがボスのプルプリミーキプルーンなの！？え…そんな肥満のおつさんが…？」

エイ 「体型は関係無いだろ！」

側近 「あーちょっとその辺にして、」

晴 「ていうかボスが死んだの？私の知らないところで勝手に？私じゃないやつにやられてんじゃないわよー！」

エイ 「うるせえ！俺だってあんなあつけなくやられるとは思ってなかったんだよ！」

晴 「誰にやられたのよ！？」

エイ 「なんか…サラリーマンにだよ！」

晴 「だっさ！どうなったらそういう状況になるの！？」

エイ 「さっさから俺の気にしてることずけずけ言いやがって！」

側近 「あのもう時間も押してるから、」

晴 「文句あんのかコラ？」

エイ 「やんのかコラ？」

博士 「あー！まじかる☆ぷりちーってお前かー！？」

晴 「このタイミングで！？思い出すの遅いな！」

側近 「うるっさせえよさつきからお前らー！！」

エイリアンと晴、びくっとなる。

側近 「ここはな、飲み屋じゃありません！同窓会とかじゃありません！！」

エイ・晴 「えっと…」

側近 「もうお前らは死んでるんだから！今更ごちゃごちゃごちゃごちゃさえずってんじやねえよ！クソどもがよお！！」

エイ・晴 「すみません…」

側近 「マジカルプルーンとか、プリプリプリーー長嶋とかなんか知らねえけど」

エイ・晴 「混ざってます…色々」

側近 「もうそういうの関係ないから。今はお前らの立場は等しく平等だから。時間も押してるから」

エイ・晴 「はい…」

側近 「これからお前らはね、裁かれるの？分かる？」

晴 「あの…その辺のことをもう少し詳しく教えてもらいたいなーって」

側近 「ああ？だからこれからお前らは、全員天国か地獄かを裁いてもらうんだよ、閻魔様に」

エイ・晴 「閻魔様！？」

側近 「閻魔様！？じゃねえよ。普通のリアクションしかできねえんだなーお前らは」

エイ・晴 「すみません…」

側近 「そうだよお前らも良く知ってるあの、閻魔様だ。一つ忠告しておく。閻魔様は私と違って優しくないぞ。閻魔様の前では絶対変なことするなよ？段取り無視とか、茶々入れられるのが一番嫌いなお方だから。分かったな？」

エイ・晴 「はい！」

側近 「おお良い返事じゃねえか。最初からな、そういう態度だったら私も怒ったりしないからさ」

エイ・晴 「はい！」

側近 「そんじやあもう後も色々押ししてるから、お前らまとめて裁いてもらうからな」

エイ・晴 「はい！」

側近 「よし。それでは閻魔様！ご登場ください！」

エイ・晴 「はい！」

側近 「もう返事はいいんだよ」

派手なBGMと照明効果。その途中、殺し屋、上手から登場する。驚く3人。

晴 「この人が閻魔様？」

エイ 「想像していたのと違う…」

博士 「でも心なしか悪い顔はしてるのう」

側近 「いや、ちょっと、」

閻魔、下手から堂々と登場する。しかし側近以外、殺し屋に注目しているため閻魔に気付かない。閻魔、戸惑っている。BGM終了。

殺し屋 「あのー…一旦保留っていつまでなんですかね？」

エイリアン、晴、博士、閻魔に気付く。

エイ 「なんだあいつ？」

晴 「え？いつの間に？」

博士 「迷子か？」

間

閻魔 「ちよつとこれどういうこと良ペーイ？」

側近 「すみません閻魔様！全てはこの男の間の悪さが原因でございまして！」

殺し屋 「え？俺？」

側近 「お前だよ！お前空気読めないにも程があるわあ…」

殺し屋 「いやだって奥の部屋でずっと暇だったから…」

側近 「マジで何なのお前？閻魔様こういうの一番嫌うからね？」

殺し屋 「なんかすいません…」

閻魔 「良ペーイ？」

側近 「はい！何でしょうか閻魔様？」

閻魔 「もう一回やる？」

側近 「もう一回やりましょう！よろしくお願いします！」

閻魔 「次は期待してるからね」

閻魔、下手からはける。

晴 「え？どういうこと？」

エイ 「今のが閻魔様なのか？」

側近 「そうだよ！こんななんか…かろうじて人間みたいなやつと間違えるんじゃないよ！」

殺し屋 「酷いなおい」

側近 「もう一度閻魔様に登場して頂くから。今度はお前らもちゃんと空気読んだリアクシヨンするんだぞ」

エイ・晴・殺し屋 「えー…」

側近 「えー…じゃないんだよ！このままだと全員地獄行きにされるぞ？」

エイ・晴・殺し屋 「えー…!?」

側近 「だからちゃんとやれよ？良いな？」

エイ・晴・殺し屋 「はい」

側近 「あ、お前（殺し屋）はもう地獄だから」

殺し屋 「え？」

側近 「それでは閻魔様！ご登場ください！」

派手なBGMと照明効果。閻魔、下手から登場する。各々わざとらしいリアクシオンを取る。側近が一番わざとらしい。

エイ 「ひ、ひえ〜！」

晴 「あ、あれが閻魔様なのね…!?」

殺し屋 「想像以上におっそろしいぜえ〜！」

側近 「ああああ!! 何たるご貫禄！広大な山の如し！ひえい〜!!」

間

閻魔 「わざとらしい」

側近 「わざとらしいんだよお前らー！」

閻魔 「お前（側近）が一番やり過ぎてたよ」

側近 「私が一番やり過ぎてました」

殺し屋 「なんだあいつ」

閻魔 「はい、それではお前らに判決を下します」

エイ・晴・殺し屋 「え？」

閻魔 「ゴートゥーヘル！」

側近 「ゴートゥーヘル！（法螺貝を吹く）」

エイ・晴・殺し屋「えー！？」

側近「はい、地獄の入口はあのそっち行って左曲がってもらえばすぐ分かるから」  
殺し屋「ちよっと待ってくださいよ！」

晴「なんでそうなるのよ！」

エイ「横暴だ！」

側近「だから言っただろう！閻魔様は大変敵しいお方なのだ！」

晴「そりゃあこいつら2人は（エイリアンと博士）地獄で良いけど私が地獄っていうのはおかしいでしょう!？」

エイ「なんだお前！裏切るのか？」

晴「いやいや元々仲間じゃないわよ。むしろ敵同士だわ」

博士「ワシは地獄でも良いのう」

晴・エイ「は？」

博士「地獄の方が面白い研究ができそうじゃわい（邪悪な笑み）」

エイ「こいつやべえじいさんだ」

晴「だったらジジイは天国行きなさいよー！」

博士「嫌じゃー！地獄の方が楽しそうじゃー！」

殺し屋「俺は？少し前まで保留だったじゃないか」

側近「はあ？さっきも地獄だって言っただろ？こうなったのもお前が原因だろうが馬鹿。

もう喋んな馬鹿。馬鹿」

殺し屋「俺への扱いどうなってるんだよ」

晴「閻魔様！私は生きている時、正義の魔法少女でした！ですからもう一度考え直してください！」

閻魔「なんだと？正義の魔法……」

閻魔・殺し屋「少女？」

側近「閻魔様、そのやり取りはもう先ほどやっているのここは一旦受け入れてください」

閻魔「分かった……」

側近「（資料を見ながら）ハル・コクブン。確かに最近には正義の味方マジカル☆プリティーとして活躍していたみたいだ」

晴「ほら！これは天国ですよね？」

側近「しかーし！そのせいで及んだ被害もある！」

晴「え？」

側近「エイリアンとの戦いにより、破壊された建物、荒れてしまった田畑等、かなりの数だ。そして極めつけはそのマジカルパワーを使った後に出る、強烈な臭さによる悪臭被害！」

殺し屋「そんな悪臭が出る力なんだ……」

晴「いやいやそれ私のせいになるんですか！？特に最後のは納得できないよ！全部戦

うための不可抗力ですよ！」

側近「本当に全部、不可抗力か？」

晴「え？」

側近「なんか戦っていくうちにテンション上がったとか、日ごろのストレス解消のために、必要以上にそのマジカルパワーをぶっ放したことだってあるんじゃないのか？」

晴「…まあ…そう言われると…少しは」

側近「ほれ。お前が無駄に放った攻撃で壊れた建物の被害額とか分かるか？」

晴「…そんなリアルな話、します…？」

閻魔「ハル・コクブン、残念だがそういうリアルな被害等も考慮しなければならない。善行だけで判決を下すことはできないのだ」

晴「そんなさ」

閻魔「よって、ハル・コクブン！お前の判決は…一旦保留！」

側近「一旦保留！（法螺貝を吹く）」

晴「保留かい！ヒヤツとしたあ」

閻魔「次はお前（博士）だ」

博士「ワシか」

側近「ケン・ナカタニ。科学者。幼年期より天才ぶりを発揮し、僅か10歳で高校を卒業」

晴・殺し屋「早！」

側近「さらに11歳で大学を卒業」

晴・殺し屋「早!!」

側近「そして12歳で童貞を卒業」

殺し屋「そっちも早い！そっち関係もすげーんだな爺さん！」

側近「相手は近所に住む人妻。場所は自宅」

殺し屋「シチュエーションも良い感じじゃねえか！」

側近「人妻の年齢は52」

殺し屋「ごめん…なんか勝手に盛り上がって…」

博士「良いんじゃない…今となっては良い思い出じゃ…」

側近「そして天才的な頭脳により数々の発明品を生み出し、人類に貢献し続けた」

博士「うむ」

殺し屋「色々スゴイなこの爺さん」

晴「ただのイカレたジジイじゃなかったのね…」

側近「そして悪行。えっと…趣味が、人体実験だとか？え？マジで？えー…うわうわうわ、えげつねえな…え？あの事件にもなった犯罪者の行方不明者達って…え？嘘だろ？あの大事件になったバイオハザードの原因が…えー…グロ！うわうわうわ…  
…趣味、人体実験！以上！」

殺し屋「色々ヤバいぞこの爺さん！」

晴「ただのイカレたジジイじゃない！」

博士「てへ☆」

側近「これ以上は私の口から言えん……」

エイ「マッドサイエンティストだ……！」

博士「もう、昔の話じゃ」

晴「いや私はけっこう最近だからね、変な力注入されたの」

閻魔「うむ……確かに人類への貢献も考慮に入れたい。が、ヤバい要素が多すぎる。残念ながらこの爺さんは迷う必要もない……！ケン・ナカタニ！お前の判決は……！」

晴「あ、でもこのジジイ地獄に行きたがってますよ！」

間

閻魔「一旦保留！」

側近「一旦保留！（法螺貝を吹く）」

博士「畜生！」

晴「危なかったわね」

博士「地獄で研究したいく合法的な場所で人体実験がしたい」

側近「いや別に地獄でも合法じゃないよ」

博士、驚いた顔をする。

閻魔「最後はお前（エイリアン）だ」

エイ「はい」

閻魔「話は聞いているぞ。宇宙人なんだってな？」

エイ「はい」

閻魔「こいつな……普通に裁いても良いものなのだろうか？良・ペイ、一応詳細を」

側近「はい。（資料を見ながら）えー本名、寄生型エイリアン。ふる……ふる……ん？」

エイ「プルプリプルーンです」

側近「うん？で、そのボスで本名、ふる……ふる……ん？ふる、ふり、みき……ん？……お前は地獄！」

エイ「ちよっと！もう呼び方とか何でも大丈夫なんで！」

閻魔「続きを」

側近「はい。つまりお前はエイリアンのボスで、えー2年前地球に侵略してきたと。そしてその人間、ユウジン・タナカの体に乗っ取ったと。そしてそのまま手下のエイリアンに地球を襲わせた」と

閻魔 「善行は？」

側近 「主食がゴキブリ、くらいですね」

晴 「気持ち悪！」

エイ 「あれ美味いよね」

殺し屋 「いや確かに夏場ゴキブリが減るのは良いことだけど」

晴 「そんなの善行じゃないわよ！もう地獄よ地獄！」

閻魔 「うむ。それでその体の、ユウジン・タナカ自体の悪行・善行はどうなっている？」

晴 「え？」

側近 「申し訳ございません。ただいま部下に資料を用意させており、間もなく到着します」

晴 「どういうこと？」

閻魔 「その体にはユウジン・タナカの魂も残っているのだな。体に乗っ取られる前のユウジン・タナカの行いも考慮しなければならないのだ」

晴 「なるほど」

閻魔 「よって、一旦保留！」

側近 「一旦保留！（法螺貝を吹く）」

間

閻魔 「それじゃあ解散かな？」

晴 「いやいやいや！」

殺し屋 「結局全員保留じゃねーか！」

側近 「いやお前は地獄だよ」

閻魔 「うん」

殺し屋 「えー…さっきのことまだ根に持たれてた」

側近 「では私はこいつだけ地獄に連れて行きますので」

殺し屋 「俺マジで地獄なの？マジで地獄なの？」

側近 「そもそも殺し屋だろうがお前。何を天国だと思ってるんだよ」

殺し屋 「…分かった。それじゃあ最後に1つ聞かせてくれ」

閻魔 「なんだ？」

殺し屋 「最近ここにヒライマリ、あーマリ・ヒライってやつも来ただろ？あいつも地獄に行ったのか？」

閻魔 「マリ・ヒライ？そんな奴、裁いたか？」

側近 「…聞き覚えがありますが、まだ裁いてはいないですね」

側近、資料を調べ始める。

殺し屋「え？そんなはずは…」

晴「ヒライマリ…？ヒライマリって…最近私が戦ったエイリアンの幹部、プルプリグリート・グーラに寄生された女性の名前じゃない！」

殺し屋「はあ？どういふことだ？」

晴「私、そのマリって人に寄生した幹部のエイリアンに負けて…多分それで死んでしまったのよ。あの人…めっちゃくちゃ強かったから」

殺し屋「そんな…それって何日のこと？」

晴「えっと確か、戦い始めたのは…7月3日の夜だったかな」

殺し屋「俺が死んだ2日後じゃないか！じゃあマリ姉はあの時死んでなかったのか…！」

エイ「どういう経緯かは知らないが、我々プルプリプルーンに寄生された人間の生命力は格段に上がる。普通の攻撃で死ぬことはないだろう」

殺し屋「まさか…あいつの言っていた病気で、エイリアンに寄生されたことだったのか！」

側近「いや、マリ・ヒライは確かに病気で死んだようだ。そして人間としてはもう、死んでいる」

殺し屋「え？」

側近「本来ならその病気によってすでにあの世に来ているはずだった。しかし病気で弱いきり抵抗できない体をエイリアンに狙われ、寄生されたのだろう」

エイ「グギャギャ…！そうかもなあ」

側近「そして現在は、そのエイリアンに無理やり生かされている状態という訳か…」

側近に電話がかかる。

側近「(電話に出る) 良・ペイだ。どうした？」

殺し屋「ふざけんな！そんなの生きてると言えるか！マリ姉は分かっていたんだ…！自分が得体の知れない何かに徐々に支配されていっていることに…！でも1人じゃどうにもならなくて…！だから俺なんかには、助けを求めにきたんだ…！」

エイ「しかし今となっては俺の優秀な手駒。グギャギャ…！今も戦い続けているだろうなあ」

殺し屋「てめえ…！」

側近「…分かった。すぐに閻魔様にも報告する。それでは引き続き監視してってくれ(電話を切る)」

閻魔「どうした？」

側近「地上にいる部下の天使から連絡がありました。現在地上ではエイリアンの残党が人間に寄生し、一斉に人類へ攻撃を仕掛けているとのことですよ」

晴・殺し屋「え！？」

エイ「グギャギャギャ！始まったか！」

閻魔 「うむ…それは厄介なことになったな」

側近 「そうですね…このままではあの世に魂が大量にやって来てしまいます」

殺し屋 「しかも操られたマリ姉の手によってだろう…！マリ姉がそんなこと望む訳ねえのに…！畜生が！」

晴 「私が死んでいなかったら…！」

間

エイ 「…そこで閻魔様。俺に1つ考えがあります」

閻魔 「なんだ？」

エイ 「とその前に1つ、質問があるのですがよろしいですか？」

閻魔 「言ってみろ」

エイ 「閻魔様は魂を導く存在だと聞いております。天国と地獄へ魂を導く以外にもできることはあるのではないのでしょうか？」

閻魔 「何が言いたい？」

エイ 「ここにいる者を生き返らせることも、できるのではないのでしょうか？」

晴・殺し屋 「え！？」

閻魔、じつと真剣な顔をしている。おもむろに側近が耳うちする。

閻魔 「できるぞ」

晴 「いや絶対知らなかったでしよ閻魔様！」

閻魔 「いやー生き返らせるのとか超久しぶりだったから」

殺し屋 「どうか…ホントに生き返れるのか！？」

側近 「ああ。ただし特例でない限り、1日だけだ」

エイ 「十分です」

晴 「ちよつとあんた…！何を考えているの…？」

エイ 「閻魔様！俺が地上へ生き返り、暴れている部下達を止め、母星へ帰るように説得しましょう！」

晴・殺し屋 「はあー！？」

閻魔 「ほう」

側近 「確かにそれが可能なら大量の魂がああ世へやって来るのを防ぐことができますね」  
エイ 「俺は…むざむざ部下が殺されるのを見たくないのです…！それに、お別れも言えな

かった部下達の顔を、もう一度見たいのです…！」

晴 「よくもまあぬけぬけとそんなことが言えるわね？」

閻魔 「お前…（感動）」

晴 「閻魔様？いやこいつの嘘ですよ絶対！」

エイ 「お頼みます…！あの世に戻ったら地獄でもどこでも行きますから！」

晴 「いやいや！信じちゃ駄目ですって！絶対なんか…変なことしますよこいつ！」

閻魔 「そうなの？」

エイ 「しませんよ」

閻魔 「しないってさ」

晴 「あーもう…！そうだ！だったら私を生き返らせてください！そうすればエイリアンを根こそぎボコボコにしますから！」

エイ 「愛する部下達がお前にボコボコにされる姿を…ここで黙って見ていると言うのか…？（泣く）」

閻魔 「エイリアン…（泣く）」

側近 「とんだ悪魔ですねあいつ（泣く）」

晴 「いやいや！流れ過ぎですよお二人さん！」

エイ 「閻魔様！信じてください！地上に戻り次第、必ず部下達を母星へ帰します！」

閻魔 「あい分かった！」

晴 「あい分らないで！」

閻魔 「ではそのエイリアンに今から判決を下す！」

エイ 「はい」

閻魔 「お前を…地上に生き返らせる！」

側近 「生き返らせる！（法螺貝を吹く）」

晴 「そんなのおかしいですよ！」

殺し屋 「そうだそうだ！」

側近 「ええーい！雑魚どもは黙ってる！もう判決は出たんだ！」

閻魔 「良。ペイ、天国にいる神ちゃんに連絡してくれ。今から1人生き返らせると」

側近 「かしこまりました（電話をかける）」

閻魔 「よし。それではエイリアン、ワシの前へ」

エイリアン、閻魔の前まで行こうとするがその間に晴が割って入る。

閻魔 「何の真似だ？」

晴 「みすみす悪の親玉を地上に帰らせないわよ…！」

側近 「…はい、失礼致します（電話を切る）。閻魔様、神様に連絡致しました」

閻魔 「ご苦勞。（晴を指差す）良。ペイ」

側近 「はっ！手荒な真似はしたくなかったんだがな」

晴 「…何をする気？」

側近 「はあああああ…」

閻魔 「良。ペイは強いぞ」

側近、スタンガンをおもむろに取り出し、晴に浴びせる。

晴 「ぐわああああ!! (倒れる)」

閻魔 「スタンガンがあるからな」

殺し屋 「ここあの世だろ？もつとそれっぽいのがなかったのかよ！」

側近 「暴れた魂を大人しくさせるものだ。しばらくは動けない」

閻魔 「良。ペイ、彼の拘束具を」

側近 「はっ！」

側近、エイリアンの拘束具を外す。

閻魔 「ではエイリアンよ、頼んだぞ」

エイ 「任せてください」

エイリアン、閻魔の手を掴む。

閻魔 「なんだ？」

エイ 「この時を…待っていたぞ！」

エイリアンの触覚が光り、エイリアンの声がエコー『』になる。

エイ 『グギャギャギャギャ！馬鹿め！元々この拘束具を外すことが狙いだっただけだ！接触してしまえばこちらのもの！このままお前の体に乗っ取ってやるわ！そしてあの世から！裏から！地球を支配してくれるわー！』

側近 「え？」

閻魔 「どういうこと？」

晴 「この状況でまだ分かんないの！？こいつに騙されたんですよ閻魔様は！」

閻魔 「はあ？この野郎！ふざけんな！」

エイ 『今頃気付いてももう遅い!!』

側近 「閻魔様！」

雷鳴。暗転。

間

明転。

エイリアン（以下田中）、頭の触覚・額の目・後ろの大きな目が外れ、倒れている。  
閻魔の頭に触覚が付いている。

博士「どうなったんじゃ？」

殺し屋「乗っ取られたのか…？」

晴「でも、閻魔様よ…？そんな簡単に乗っ取られるとは…」

閻魔「…ぐっぐっぐーぎやっぎやっぎや！（じろつと全員を見渡す）……ぐぎやぎやぎや！  
や！ぐぎやぎやぎや！（じろつと全員を見渡す）……ぐぎやぎやあ…！ぎやあ…！  
……ぎやーとるず。…ぎやば……さて、今の私はどっちでしょうか？（すごい陽気な感じで）  
な感じで」

晴・殺し屋「……閻魔様？」

閻魔「ブッブー！エイリアンでしたー！（すごい陽気な感じで）」

殺し屋「だとしたらキャラ変わり過ぎだろ！」

側近「閻魔様、御戯れはその辺で」

閻魔「はいはい」

晴・殺し屋「え？」

閻魔「ああ大丈夫。全然乗っ取られたりしてないから」

殺し屋「ほ、ほんとに？」

晴「でも触覚が！」

閻魔「え？（頭を触る）うわ！キモーなんだこれ！…？おらあ！（触覚を引き千切る）」  
晴・殺し屋「えー…」

側近「そもそも閻魔様は全ての魂を司るお方。エイリアンとはいえやつもここでは1つの  
魂に過ぎん。閻魔様を支配することなどできる訳がないだろう」

閻魔「そゆことー」

晴「えつとそれじゃあ…あのエイリアンは何？」

閻魔「ああなんかこの辺（お腹を擦る）にいるな。え？何々？なんか言ってる…声ちっちゃ  
や！全然分かんない」

田中、起き上がる。晴・殺し屋、身構える。

閻魔「安心しろ、そいつはもうエイリアンではない」

側近「ただのタナカだ」

田中「あの…ここは？」

閻魔「とりあえず放置」

晴 「えっと…それじゃあ結局この後どうするんですか？」

閻魔 「ふむ、そうだな。現在、1日生き返る枠が1つ余ってしまったている訳だが」

晴 「え？」

閻魔 「別の誰かを生き返らせるというのも悪くないかもしれんな」

晴 「え？え？」

側近 「そうですね、閻魔様。神様に1人生き返らせると言ってしまった手前、無しにする

のはまた色々面倒ですし…（晴達の方を一瞥する）私に良い考えが」

閻魔 「うむ。私もおそらく同じことを考えておる」

晴 「それってもしかして…！」

博士 「ワシを生き返らせようとしておるのか…？」

殺し屋 「じいさんは絶対違うよ」

田中 「何の話？」

閻魔と側近、互いに頷く。

閻魔 「それでは、判決を下す…！ユウジン・タナカを生き返らせる！」

側近 「ユウジン・タナカ！（法螺貝を吹く）」

晴 「えー！？」

田中 「え？」

晴 「いやなんでだよ！今の流れは絶対私だったでしょ！私がエイリアン倒しに行くんじゃないの！？こんなおっさんが生き返ったところで何も変わらないでしょ！」

閻魔 「いやだってこの人エイリアンに乗っ取られただけだからな。可哀想じゃん。ただ巻き込まれて死んじゃっただけだし。なんか見た感じ良い人そうだし。悪人じゃない限り、無下にはできんよ」

晴 「えー…めっちゃ正論じゃん…」

田中 「えっと…生き返るってのは？」

側近 「例え1日だけだとしても、悔いのないように地上で時間を使うんだぞ」

閻魔 「どうか今回は特別扱いでも良いかもしれんな。別に1日だけじゃなくても、」

部下 「遅くなりました！申し訳ございません！」

側近の部下、上手から登場する。

部下 「ユウジン・タナカの生前の記録でございます（資料を側近に渡す）」

側近 「ご苦労」

部下、上手からはける。

側近 「エイリアンに体に乗っ取られる前のタナカの資料が届きましたので一応読ませて頂きます。えっと何々…あれ？ユウジン・タナカってのは偽名みたいだな。本名、ジャック・D・ボーン。生まれはメキシコ、チワワ州。数々の人間、若者、老人、男性、女性を問わず、痴漢を繰り返す。ついた呼び名は無法地帯のジャック。警察にメキシコを追い回され日本へ高飛び。その後は整形と日本の偽名登録を済まし、再び痴漢を繰り返す。死因はピストルの弾を急所に撃たれて死亡。享年40歳」

間

側近・殺し屋 「こいつのことかー！」

晴 「元からけっこうな悪人じゃないの！」

田中 「な、なぜそのことが…!？」

殺し屋 「全然善人じゃないな」

閻魔 「地獄！判決は地獄！」

側近 「地獄行き！（法螺貝を吹く）」

閻魔 「さっさと連れて行け！」

側近 「連れて行け！」

田中 「え？え？どういう状況？地獄って何？」

側近 「この変態クソ野郎が！」

閻魔 「地獄でクソと一緒に煮込まれる！」

側近の部下、上手から登場し、田中を引っ張り、下手からはける。

閻魔・側近 「ふー…」

閻魔 「危うく判決ミスを犯すところだった」

側近 「危なかったですね」

殺し屋 「いや普通に判決下してなかった？」

閻魔 「ふむ。現在1日生き返る枠が1つ余っている訳だが、別の誰かを生き返らせるのも

悪くないかもしれんな」

殺し屋 「うわ、さっきの判決なかったことにしようとしてる」

晴 「今度こそ、信じてもいいのよね…?」

閻魔 「…ハル・コクブン！前へ！」

晴 「…はい！」

閻魔 「それではお前に判決を下す…！地上のエイリアンを殲滅させるため、1日生き返らせる！」

側近「エイリアン殲滅！（法螺貝を吹く）」

晴「承知しました！」

晴、閻魔の前へ出てくる。『ばあー！』という効果音。

側近「そこ（上手）から出て、そのまま真っ直ぐ進んだ非常口ってところに入れば地上に出られるから」

閻魔「出る場所はエイリアンが暴れている所で良いな」

晴「はい！それじゃあ行つてきます！」

晴、はげようとする。

博士「待つのじゃまじかるぷりちー」

晴「え？」

博士「待つのじゃ…待つのじゃ！」

晴「いや待ってる待ってる。何？大事な話？」

博士「うむ。地上に戻ったらまずはワシの研究所に寄りなさい。そこにワシのPCがある。

その中に保存されている…ワシのエロフォルダを破壊してくれ」

晴「そんな私的な用事かい！全然大事じゃないよ！」

博士「頼む…！」

殺し屋「消去してやってくれよ。これも大事なことだぜ…？」

博士「あと研究所の保管庫にまじかる☆ぷりちーばわーあつぷセットもあるから」

晴「そっち先に言いなさいよ」

博士「保管庫のパスワードは助手のアンドロイド、アン子が知っておる。研究所にいるはずじゃ」

閻魔「それではお前が地上に出る場所はその研究所にしておこう。この爺さんが亡くなつた場所が良いのだろうか？」

博士「うむ」

晴「助かります。それじゃあ今度こそ、」

殺し屋「待て。俺からも伝えておきたいことがある」

晴「あんたのエロフォルダまでは破壊しないからね？」

殺し屋、落ち込む。

晴「じゃあ行くから」

殺し屋「待て！それだけじゃない！マリ姉のことだ」

晴「え？」

殺し屋「お前一回マリ姉に負けてんだろ？だからあいつの弱点、苦手なもんを教えてやるよ」

殺し屋、晴に耳うちする。

晴「え！？けっこう普通ね」

殺し屋「ピンチになったら使ってみてくれ」

晴「…まあ、考えておくわ。ありがとう」

晴、上手からはける。

殺し屋「マジカル☆プリティー…マリ姉のこと…頼んだぜ」

博士「エロフォルダのことも…頼んだぜ」

閻魔「それでは我々は彼女の活躍を直接見ているとするか」

殺し屋「え？様子が見られるんですか？」

閻魔「うむ。皆、後ろに下がるが良い」

全員、舞台後ろに移動する。

閻魔「では、良・ペイよ」

側近「はい。モニターオン」

舞台前方が地上となる。その様子（映像）を見ながら喋る閻魔・側近・殺し屋・博士の4人。

舞台前方で人間に寄生したエイリアン複数体が人々（3幕の先輩もいる）を襲っている。

側近「派手にやってるねー」

殺し屋「くそ！好き放題やりやがって！」

そこに1幕のアンドロイド（アン子）と3幕の部長が舞台前方に現れ、拳銃を使いエイリアン達と戦う。

博士「ワシの開発したアンドロイドと対エイリアン兵器じゃ」

殺し屋「よし！頑張れ！…でも、寄生されてしまった人達が犠牲になるのは可哀想だな…」

博士「それは大丈夫じゃ。あの拳銃に入っている弾は対エイリアン用の特製品。まだ寄生

されて間もない体ならば中のエイリアンが消滅するだけじゃ」

アンドロイド、執拗に撃っている。

殺し屋「それにしても撃ち過ぎじゃない？あの人に何の恨みがあるんだよ」

しかしアンドロイド達、段々劣勢になる。そこにマジカル☆プリティーに変身した晴が現れる。

殺し屋「出た！」

博士「やっちまえ!!」

晴、エイリアン達をマジカルパワーで一掃する。

閻魔・側近・殺し屋「おっ！」

博士「これがマジカルパワーじゃ！」

晴の元を集まる人々。しかしすぐに鼻をつまんで逃げ出す。

殺し屋「え？なんで逃げてるの？」

博士「今あやつの体はとても臭い。マジカルパワーを使ったからのう」

殺し屋「さっき言ったやつか！呪いみたいな力だな！でもあの、寄生された人達は体とか大丈夫なの？」

博士「すまない…対エイリアン用の銃弾とは違い、マジカルパワーを受けた普通の人間は…」

殺し屋「え？まさか…！」

博士「しばらく臭くなる」

殺し屋「臭さへの執着どうなってるんだよ！」

殺し屋「勿論やられるのは中のエイリアンだけじゃ」

側近「うん？」

女殺し屋の姿をしたエイリアンの幹部ブルブリグリートグーラが現れる。

殺し屋「マリ姉！」

側近「ようやく大将がおいでなさったな」

晴と女殺し屋の戦いが始まる。しかし晴が劣勢になっていく。晴、女殺し屋にゴキブリを見せる。

殺し屋「出た！」

側近「弱点ってゴキブリか？」

殺し屋「ああ。これで少しは隙を見せるかも、」

女殺し屋、喜んでいる。

殺し屋「なんで!？」

閻魔「ゴキブリは確か…エイリアンの好物ではなかったか？」

殺し屋「そうだったー！」

側近、殺し屋を思いつき叩く。

殺し屋「そこまでする？」

女殺し屋、ゴキブリを食べようとしたところで手が止まる。小刻みに震え出し苦悶の表情になる。そして絶叫し、うずくまる。

側近「苦手意識が勝ちましたね」

殺し屋「エイリアンの支配を凌駕するなんて…！そこまで嫌いだったんだな…！」

晴、この隙に必殺技で女殺し屋を倒す。周りの人々もまとめて鼻をつまんで倒れる。

殺し屋「周りの人達もまとめて倒れたー!？」

博士「浴びるようにマジカルパワーを使っていたからな。今のあやつは災害レベルの臭さじゃ」

側近「しかし、人類の勝利ですね」

閻魔「うむ」

殺し屋「マリ姉…今度こそあの世で待ってるぜ」

閻魔「こいつも悔しがっておるな！（お腹を叩く）はっはっはっは！」

側近「待ってください、誰か出てきました。あれは…ハル・ユクブンの恋人でしょうか？  
……ふむ、野暮なシーンになりそうですね」

側近、前方の映像を消す動作。舞台前方の人々、一旦全員はける。

殺し屋「ああ」

側近「それでは私達は、このシーンがもっと良く見える場所へ移動しましょう」

閻魔・博士「行こう行こう！」

殺し屋「野暮だねー？」

博士「お主は見に行かないのか？」

殺し屋「行くに決まってるじゃないですかー！」

舞台上の4人、下手からはける。入れ替わりで下手から希望、上手から晴が出てくる。

希望「晴…！」

晴「へへへ…なんか色々あって、生き返っちゃった。なんて…信じられる？」

希望「…なんでも良いよ。こうやってまた、晴と会えたんだったら」

晴「て言っても…1日だけなんだけどね」

希望「そっか…1日だけなんだね…」

晴「死んでしまつて…ごめんなさい」

希望「(首を横に振る) 1日だけでも、帰つて来てくれてありがとう。ホントに…嬉しいよ」

希望、晴に近づく。

晴「待つて。今の私超臭いよ。これでもかってほどマジカルパワー使ってきたから。話すのはそこから良いよ」

希望、晴を抱きしめる。

希望「ホントだ。めっちゃくちや臭い。これ本当に鼻曲がるかも」

晴「だったらもつと離れば良いじゃない」

希望「なんで？」

晴「ホント馬鹿ね…でも、最後にもう一度会えて…よかった」

希望「何言つてんの？あの世に戻るまでまだまだ付き合ってもらうよ。例えば…結婚式とか」

晴「え？」

希望「まあ簡単なだけ。そういうのやってくれる所、急いで探そうよ」

晴「………ちよつと、マリッジブルーなんですけどー」

「ヘルか☆ヘブンか」

希望「じゃあやめる？」

晴「…やめない」

徐々に暗転。

【エピソード】

舞台はあの世の裁きの間。  
明転。

舞台には閻魔・側近・殺し屋・女殺し屋・博士の5人。

閻魔「それではトシユキ・ヒライ、マリ・ヒライに判決を下す。お前らは2人揃って…地獄行き！」

側近「2人揃って地獄行き！（法螺貝を吹く）」

殺し屋「結局地獄か…」

女殺し屋「あたしらは殺し屋なんだ、仕方ないさ。でもま、私は可愛い弟がいるなら地獄でもなんでも良いよ」

殺し屋「へっ…まあそうだな」

女殺し屋「お、少しは素直になったようだな」

殺し屋「うるせえ！地獄では負けねえぞ、マリ姉」

女殺し屋「せいぜい頑張りなさいな」

側近、下手へ手をやる。殺し屋・女殺し屋、下手からはける。

閻魔「それではケン・ナカタニ、判決を下す。地獄行き！」

側近「地獄行き！（法螺貝を吹く）」

博士「感謝します」

閻魔「お前のような者を天国に行かせる訳にもいかないしな」

側近「まさか地獄に行きたがる者がいるとは…マッドサイエンティストの考えは理解できませんね」

博士「ほっほっほ」

晴、下手から現れる。

晴「戻りました」

閻魔「うむ。ご苦労であったな、マリツジブルー」

側近「ちよ、閻魔様（笑いを堪える）」

晴「え？なんでそれ知ってるの？さてはどっかから見てたでしょ!？」

閻魔「見てない見てない」

側近「じゃあやめる？」

博士「…やめない」

晴 「やっぱり見てたんじゃない！悪い人達だね」

閻魔 「はっはっは…むむ！」

側近 「どうされましたか？」

閻魔 「いや、私の中のエイリアンがな…何？声小さいから…え？なんだと！」

側近 「奴はなんと？」

閻魔 「うーむ。どうやらこいつが言うにはまだまだ仲間のエイリアンが地球へ侵略してくるみたいだな。自分を生き返らせればその度に追い返してやると言っているのだが」

側近 「信用できませんね」

閻魔 「かと言ってこのままやってくるエイリアンを放置する訳にもいかないし、そもそも

こいつ邪魔だから早くワシの中から捨てたいし…どうしたものか」

側近 「何か良い考えありませんかねえ」

晴 「あの一。お取込み中すみませんが、私の判決はどうなるんでしょう？いや、自分で言うのもあれなんですけど…けっこ頑張ったんでね。天国じゃないかなー？とは思うんですけど…？」

晴をじつと見つめる閻魔と側近。

晴 「どうでしょう…？」

側近 「閻魔様、良いことを思い付きました」

閻魔 「うむ、ワシもおそらく同じことを考え付いたぞ」

晴 「え？え？」

閻魔 「待たせたなハル・コクブン！それではお前に判決を下す！」

晴 「はい」

閻魔 「お前にこのエイリアンを寄生させ、もう一度生き返ってもらう！」

側近 「エイリアン寄生！そして復活！（法螺貝を吹く）」

間

晴 「はあー！？どういうこと！？」

閻魔 「ああ、しかも今度は1日ではない。特例だ。お前の寿命が尽きるまでずっとだ」

晴 「特例って…！だからなんで！？」

側近 「お前の体であるボスのエイリアンを飼ってもらい、仲間のエイリアンが地球にやってきた時、本当に追い払うかどうかを監視してもらったためだ」

閻魔 「まあ仮にこいつが追い払わなくても、お前の力でそのエイリアンを倒してくれれば問題ないしな」

晴 「いやいやいやいや！ちょっと待ってよ！そもそもそんなもの寄生させられる訳ないでしょ！？体が乗っ取られるかも知れないし！」

閻魔・側近、博士を見る。

博士 「マジカル☆プリティーにはエイリアンに寄生されても抵抗できる耐性がついておる」

側近 「問題ありませんね（閻魔に）」

博士 「しかし外的変化は多少現れる。頭から触覚くらいは生えるかのう」

間

側近 「問題ありませんね（閻魔に）」

晴 「問題あるよ！触覚って！絶対嫌だよ！」

側近 「大丈夫大丈夫。そういうお前も受け入れてくれるって、あの彼氏だったら」

閻魔 「馬鹿。もう彼氏じゃなくて夫だろ」

閻魔・側近 「ひゅー！」

晴 「やかましいな！」

閻魔 「どうした？生き返りたくないのか？」

晴 「え？それは…」

閻魔 「楽しく甘い新しい新婚生活を送りたいだろう？」

晴 「それは…そつすね」

側近 「はい、承認頂きましたー！」

晴 「え、ちょ、ちよつと、」

閻魔、晴の手を握る。

閻魔 「はあー！！（晴に力を送る）」

晴 「わあー！！」

徐々に暗転。

舞台中央にスポットライト。舞台には希望と頭に触覚を付けた晴。気まずそうな晴と驚く希望。しかし晴へ手を広げる希望。抱き合う晴と希望。晴の触覚が光る。徐々に暗転。

【終】